

文 化 財 学 習 会

ふ る さ と 探 訪

テーマ 多肥周辺を訪ねる

講 師 泉川 利雄

平成26年12月21日（日）

共 催 高 松 市 歴 史 民 俗 協 会
高 松 市 文 化 財 保 護 協 会
高 松 市 教 育 委 員 会

1 桜木神社

祭神 応神天皇、神功皇后、玉依姫命

仁和年間（八八五～八八九）、桜井権督ごんのかみによつて造営され、その後天文二年（一五三三）、西蓮寺の住僧 桜井権督の子孫である沙門長慶が乃生土佐守義照と図つて復興造営を行いました。

桜木神社の本殿石垣は、天保十五年（一八四四）の造営です。文政（一八一八～三〇）以後明治（一八六八～一九一二）に至るまでの間、神社の改築、修理、西蓮寺の客殿、庫裡、随神門の新築など休む間もない普請が続いていました。当時の多肥村は貧しいながら氏神のことについては、全てを捧げて奉仕しました。このことから、いかに尊神の念が厚かったかを知る一助ともなるでしょう。



桜木神社

※ 随神門

随神門は、明治維新と共に神社神道の復興を強く叫ばれるようになった明治九年（一八七六）、上多肥、下多肥両村の氏子の寄進によって建設したのですが、随神の鎮座については、その後十年間、鎮座の式典をあげることができませんでした。下多肥の氏子、福田音次郎氏はこれを嘆いて、自ら随神像二体を寄進し、この門に奉納鎮座させたのです。この神像は春日村の伏見九平太に作らせたもので、明治十七年九月、その鎮座式を執行しています。

応神天皇の隨身なので、佐伯、大伴の二臣としてもよいが、元来随神護衛の職も、その遠祖をたずねると天孫降臨てんそんこうりんの際に前駆となり兵杖を持つて付き従いました。天之忍日命、天津久米命の二神となるので、この二柱の神を門神として鎮座したといえます。



桜木神社 随神門

この二柱の神を

天孫降臨…天孫の邇邇藝命にぎのみことが、葦原中国あしはらのなかつくにを治めるために天降ったこと。

邇邇藝命は天照大御神から授かった三種の神器をたずさえ、天児屋命あまのこやねのみことなどの神々を連れて、高天原から地上へと向かう途中、猿田毘古神さるたひこのかみが案内をし、邇邇藝命は筑紫の日向ひむかの高千穂に降り立ったという日本神話。

2 多肥の出水ですいについて

井戸を掘ると、地下水が溜まります。その井戸水の表面がその所の地下水面を示しています。土地が高くて湿気が少ない土地ほどその地下水面は低く、土地が低くて湿気の多い土地ほど、その地下の水面は高くなります。

地表面と地下水面が一致すれば、常に水気を漂わせます。地表面より地下水面が高ければ地下水が湧き上がります。これが湧き水で泉となり、出水と言います。もしその面積が広ければ沼となり湖となるわけです。

多肥には数多くの出水があり、自然的に生じた出水は、肥間川界限のものです。

出水や泉は極めて狭い一局部の露出なので、田の用水にするためには、普通、人工的に周囲を広く掘り広げ、井桁いげたで囲い、湧出地点が埋まらないようにします。出水はたとえ自然に湧き出たものであっても、人工的に深く広く掘って貯水量を多くしなけ

ればいけないので、一種の小さいため池になります。そういう意味では出水もみな掘ったもので、この出水堀から人間は次第に大規模な池を掘り、堤を築くようになり、今日のダム建設へと発展していったのです。

井桁・井戸の地上部の縁に、上から見て「井」の字形に組んだ木枠

3 平井出水

平井出水は、昔は花泉出水はないずみといい、上多

肥の上所免にありながら、郡境を越えた下林村百姓の用水源になっていました。そのため、平井出水から流れ出る用水路や、宮簀の出水路など、多肥の水田を貫流する長い溝は、山田郡の大寒や郷普請奉行、あるいは山田郡大庄屋管理下に置かれた水路で、香川郡東の方で、あれこれタッチすることは出来なかったのです。

しかし、地形の関係で、平井出水よりも



平井出水

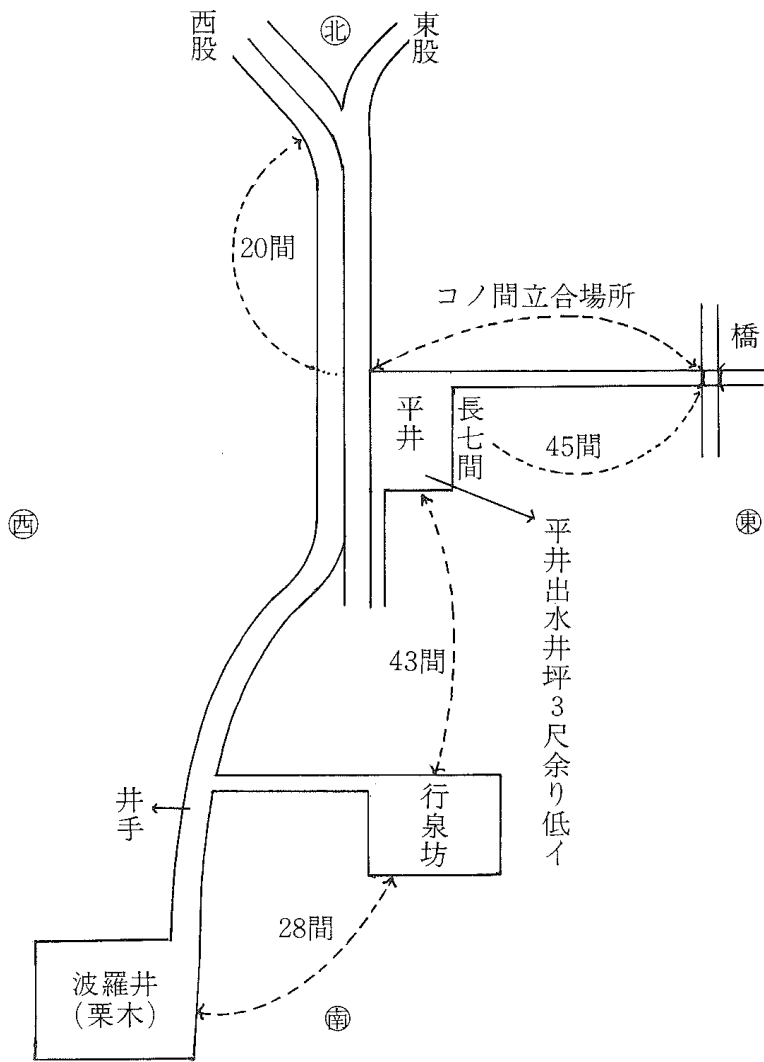
上方にある多肥の用水源 肥間出水、
行泉坊出水、波羅井（栗木）出水の水は、
伏流水となつて平井出水に吹き出る性質
を持つていました。そのため、山田郡の
方で、下林用の水路溝や平井出水を浚え
ようものなら、それがすぐに多肥の出水
の水量に響いてきます。そのため、肥間
川や波羅井、行泉坊などだけが用水源と
なり、それだけを頼りにする下多肥や、
その下流に田を持つ上多肥の百姓にとつ
ては、自分たちの用水が必要以上に下林
村に奪われるのを黙って見ていることは
できませんでした。

それで、山田郡の普請方で行う毎年の
用水路浚え、平井出水浚えの度に、山田
郡と香川郡の間で水利紛争が繰り返されていたのです。



平井出水

平井出水附近略図



平井出水付近略図（多肥郷土史より）

4 肥間川と出水

香東川流域の多肥は、単調な沖積^{ちゅうせき}平野ですが、その沖積平地形成後に、中央やや東寄りに、南北を流れる第二次発生の緩やかな川谷が刻まれました。それが肥間凹窪^{おうあ}地帯です。

その上流部の痕跡は不明ですが、熊野神社の東から天満免の西、肥間川を経て宮尻、^{らういんぼろ}凹原、帰来に及ぶ凹窪地がそれで、その周辺は早く開拓されて、今では水田になっています。ここは現在も明らかに低く、大水でもあれば流砂^{ながれご}古になる田が続く、肥間川から平井（花泉）、波羅井（栗木）、行泉坊、宮簀界限にはそれが顕著に現れ、刈取のあとは湿地となっています。それで、こういう地域を仮に肥間川凹窪^{おうあた}帯と名づけておいたのです。

この第二次発生の肥間川は、既成の平地を緩慢に流れたので、微細な粘土質土壌を流域に体積させると共に、掘り下げた流路には地下水（伏流水）を露出させ、それが自然の湧水となっています。

天満免の八十場^{やそば}出水からお椀出水、内裡出水、新出水、肥間出水、波羅井（栗木）出水、行泉坊出水、平井出水、宮簀出水、入道出水、横井出水、帰来出水などは全て、この南北に刻まれた肥間川凹窪中（旧河道筋）に湧出した出水です。

5 円成庵

観音堂の創建は、記録によると文禄三年（一五九四）で、その後の再建は、慶長十八年（一六一三）です。文禄三年の建立は今の地でなく高木城内に祭ったものと推測され、慶長十八年に乃生孫兵衛^{のむらまじへえもとただ}元忠の子与左衛門が、堂を肥間川の西側に移したとされます。昔から「多肥の観音さん」として地元の人に親しまれ、同族の崇敬者によって祭祀が行われています。また、尊像の容姿により「片足観音」、「六手観音」とも言われています。観音堂の庵号「円成庵」は、慶

長年間、文禄の建立時の寺僧円成師が隠居家を円成庵と号したことによります。



円成庵

※ 木造六字尊立像

ろくじ そんりゆうぞう
六字尊立像は、「多肥の観音さん」として昔から地元で親しまれてきましたが、その容姿から「片足観音さん」とか、「六手観音」とも言つて、土地の人々もその異様な姿に、畏敬の念を持つて崇拜してきたものです。戦国時代に多肥高木城主、乃生氏の持仏として、現在の坂出市高屋町、王越町乃生から移されたと伝えられます。

像は桧材で、高さ一九七センチメートルです。白毫びやくごうには硬玉を用い、顔は温和で眼は彫眼です。六手のうち左右第一手が胸前で印を結び、第二手は左に杵ほこ、右に太刀を



木造六字尊立像

とり、第三手は左に月輪、右に日輪をのせています。右足を膝より曲げて、左足一本で蓮台に立つところから片足観音とも呼ばれます。全体的に六臂ひによくまとめ、後に跳ねた右足もそつなく巧にこなした像です。浅い彫りと薄い体奥な

どから平安時代末期（十二世紀）の地方作と推定できます。

人々の苦悩等を救う観世音菩薩の功德は三十三あるといわれ、それに応じたのが三十三観音の由来です。その第二十六番目が六字（時）観音で、六字明王とも称し四六時中、国土人民を安泰に守護する仏です。本像は観音の化身であり、全国的にも類列を見ないきわめて珍しい像です。

6 城の神さん

「しろ」から六十メートルほど北の畑地に、地元で「城の神さん」と呼ばれる小祠があります。寂れた祠のまわりに、この辺で見つかった五輪塔石が寄せ集められています。

7 高木城跡

高木城は、県道三谷高松線に沿った、「しろ」の屋号をもつ宮本氏（以前は山崎氏）宅にあったと言いつたわれています。城主は乃生孫兵衛元忠のむらまごべえもとただで、時期は天正年間（一五七三〜九二）です。出口集落のほぼ中央に当たる微高地で、東に小さな肥間川の流れています。「翁嫗夜話」おうやわ（増田休意著・一七四五年）には、城跡について「子孫が

代々城跡に住んだが、ついに他姓の所有地となり、濠^{ほり}も埋められた」という旨のことを記しています。今も「しろ」と呼ばれている家が残っているのも、おそらくその周辺が、城構のあつた一部でしょう。

しかし、その跡も、今では他人の屋敷地や田に変貌してしまいました。堀跡を示すものは見当たりませんが、かつては堀を巡らせた土居構えの屋敷であつたのでしょうか。戦国の城、ことに多肥のような村の里城は、昔の「村主」や「名主」の屋形で、それに土居を構え、濠をめぐらせ、望楼を高くして要害にしたものに過ぎませんでした。

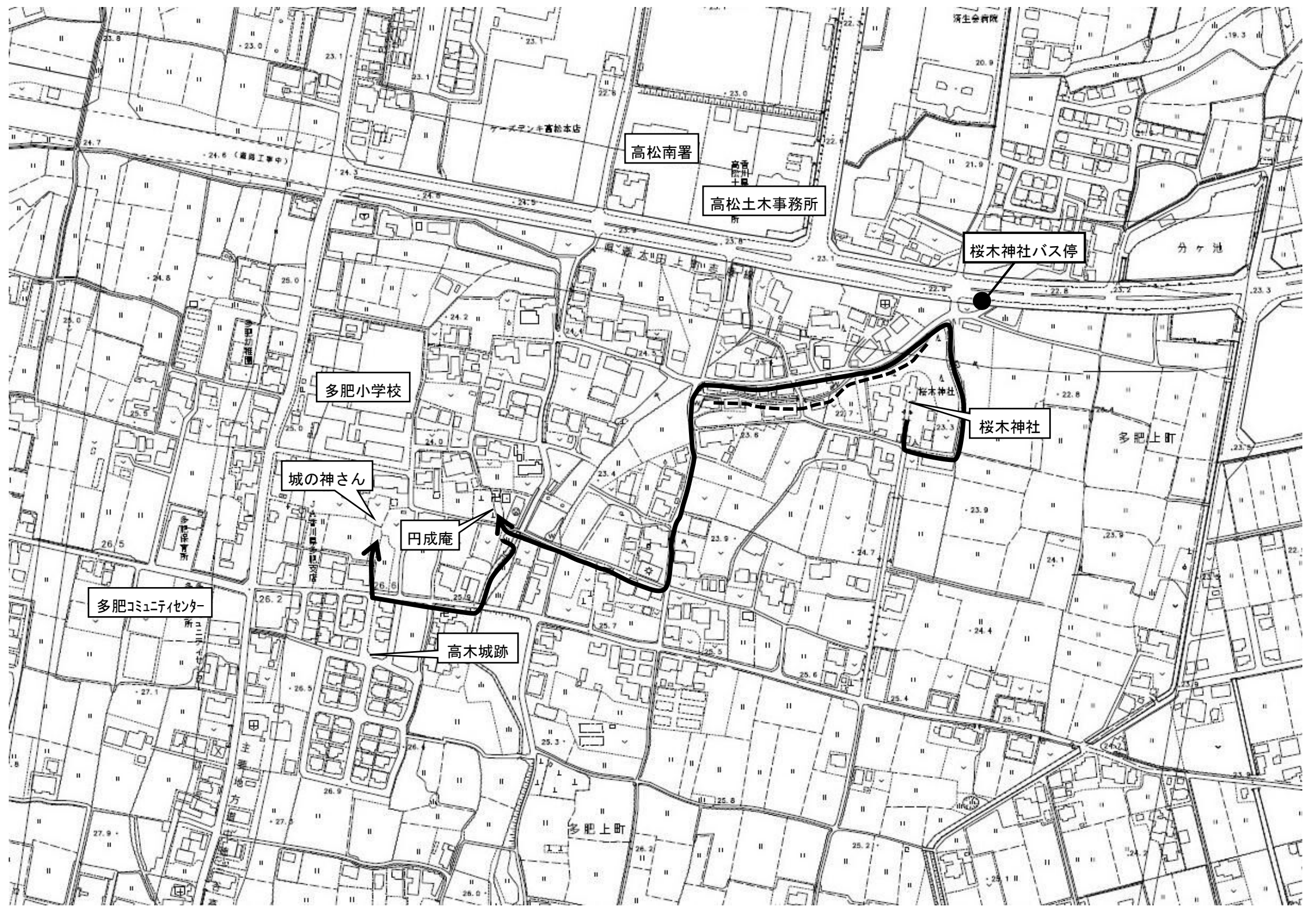
屋形の中に米倉を設け、城門に当たる長屋門には弓矢、鉄砲などの兵器を備え、母屋には主君として乃生氏が住居していました。廊下などで連絡する別棟には、一族と重臣の控えの間をとり、表門、裏門には所従、下人を抱え、周囲には土塀を巡らせ、その土塀には弓、鉄砲の狭間を設けるといふ程度の武家屋形です。濠を埋めたとありますが、その濠の外においても、おそらく肥間川の出水をも自然の地形として利用したのででしょう。

【参考文献】

「多肥郷土史」 昭和五十六年八月十日 多肥郷土史編集委員会

「古城跡を訪ねて」 昭和五十七年三月 秋山 忠

香川県中世城館跡詳細分布調査報告 平成十五年三月 香川県教育委員会
現地説明板



高松南署

高松土木事務所

桜木神社バス停

多肥小学校

城の神さん

円成庵

桜木神社

多肥コミュニティセンター

高木城跡

多肥上町

12月21日（日） 多肥上町からの復路

◆ことでんバス

〈サンメッセ・レインボー・高松駅行き〉

（桜木神社前） （瓦町） （高松駅）

11：54 発 → 12：13 → 12：24 着

13：28 発 → 13：47 → 13：58 着

次回のふるさと探訪は・・・

テ ー マ 香南町・中山城山の史跡を訪ねる

と き 平成27年1月25日（日）

9：30～12：00頃

集合場所 香南コミュニティセンター

講 師 西村 雅彦さん



（城山顕彰会理事・前香南歴史民俗郷土館館長）

杉山 有美さん（香南歴史民俗郷土館学芸員）

☆広報「たかまつ」1月15日号に開催案内を掲載しますので、ご覧ください。

☆小雨決行。警報発令等により中止の場合のみ、文化財課（TEL 839-2660「午前7時30分～開始時間まで」）でお知らせします。（電話が通じない場合は、「実施」です。）

★次回の交通案内★

◆ことでんバス

〈栗林公園・由佐・空港行き〉

（高松駅） （瓦町） （香南支所前）

8：04 発 → 8：14 発 → 8：50 着

8：29 発 → 8：39 発 → 9：15 着

「ふるさと探訪」に
参加される皆様へ



※ 参加中は、次のことに充分留意し、
安全で意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。
(必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、道路の
端を一行で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気をつけましょう。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気をつ
けましょう。
- 5 文化財や自然を大切にしましょう。